

法政大学大原社会問題研究所編
梅田俊英著

『ポスターの社会史』
大原社研コレクション』

評者：小沢 節子

私は労働運動や社会史の専門家ではないし、かといってポスターの歴史やプロレタリア美術運動に特に詳しいというわけでもない。実生活においてもできることならずと20世紀にとどまっていたいという種類の人間で、携帯電話も持たずパソコンもまともに使いこなせず、そもそも本書を書評する資格があるのだろうか、制作（執筆）スタッフに対しては申し訳ない思いである。そのような私が、本書の書評をつい、引き受けてしまったのは、四半世紀以上も前、（本書の中でも何度か言及されている）法政大学麻布校舎にあった大原社研に卒論の資料を探しに通った懐かしい記憶がよみがえったためかもしれない。その後、あの古色蒼然とした（失礼）大原社研がIT化の最先端に行く施設に変身しつつあることも、この本を手にとるまで知らずにいた。そんなわけで印象批評以上に語れることもないのだが、ただ、どうやらこの本は研究者というよりは、もう少し広く一般の読者をターゲットにしているようでもあり、私としては一般読者、あるいは他領域の読者のひとりとして、素朴な感想を述べさせていただくこととしたい。

*

まずこの本については、第一にそのユニーク

なスタイルについて言及しなければならないだろう。書評の話をいただいて早速池袋の大型書店で探してみたところ、本書は歴史や社会問題等ではなく、デザイン関係のコーナーの棚に『コピー年鑑』、『マスコミ就職読本』、『アートディレクター入門』といった本と一緒に並んでいた。こうした場所に置かれているのは、さて、執筆者やスタッフの狙いどおりなのか、そしてこうしたコーナーで本書を手にとるのがどういう読者たちなのかは私にはわからないが、外見を含めての本書のスタイル、また本を開いてみての第1部と付属CD-ROMは、そうした読者たちをもとりあえずは引きつけることだろう。迫力あるポスターのグラフィズムと直接話法の生々しさは、本を手にとって頁をめくだけでも新鮮に伝わってくる。ちなみに、所収されたポスターを立体的に構成した表紙と黒々と「読め！」と印刷された赤い帯は、凝ったつくりの本の集まったコーナーでもなかなか目だっていたと付け加えておこう。

ところで、先ほどから執筆あるいは制作スタッフと書いてきたように、本書は大原社研のWebサイトで公開された「OISR.ORG 20世紀ポスター展」の成果を本+CD-ROMという形にまとめたものであり、専門的な作業に携わった技術スタッフはもちろん、IT化に先立つ時期に貴重な資料の整理を続けてこられた谷口朗子元所員、第1部解説と第2部論考を担当した梅田俊英研究員をはじめとする多くの方々の共同研究である。つまり本書は大原社研公式サイトへの水先案内であり、大原社研で現在整理が進んでいる戦前戦後のポスターのうち戦前期のポスターに限って、コンパクトな形で紹介したものである。

こうしたユニークなスタイル自体、過渡期の出版と「本」のあり方について一石を投じたものともいえるのだが、本書の「書評」とは、こ

のスタイルについて論じるべきなのか、第1部「プロパガンダする紙片」と名づけられた各種の社会運動のポスターの紹介について考え感じたことを述べるべきなのか、あるいは第2部梅田論文「ポスターの社会史」についての批評に専念すべきなのかと、「書評」する側にとっては大変悩ましい本のつくりである。そして、正直に言って、本書にはそうした新しさと古さあるいは旧式さが入り混ざっていると思う。もちろん、一般読者から離れることなく未来へ向けて新しい形の本を作っていこうという試みには何の異論もないのだが、「ポスターの社会史」をどのように論じるかという視点からは、いくつか気がついたことがあった。

*

本書の「内容」は、第1部の実際のポスター類の紹介と第2部の論考とに分かれるが、第1部の組織と運動の解説は第2部に重複する部分も多く、むしろそうした説明は最低限に抑えて(第2部に廻して)、第1部ではポスターそのもののビジュアル面の分析や位置づけを中心にすれば、より親しみやすかったのではないだろうか。また、この第2部は戦前ポスター2700点を収めたCD-ROMからの抜粋であり、本来ならばそのCD-ROMをも「書評」の対象とするべきなのかもしれないが、ここでは第1部に紹介されたポスター類を見ての感想にとどめたい。

まず、これは多くの人に共通する感想だろうが、やはり多くのポスターのなかでも際立つのが柳瀬正夢の表現である。そして、その後の柳瀬風ポスターの氾濫ともいえる影響力の大きさに、表現の定型化、図柄のマンネリズムという形で広がっていった社会運動のポスターにおけるメディアとしてのはたらきと「芸術性」について考えさせられた。第1部で取り上げられた社会運動のポスターの大半は、その組合なり組織の性格を一目で伝える、あるいは当面の目標

を第一に印象づけるためのものであり、こうした目的がどこまで鮮明に意識されているのか、その意識の強さの度合いがポスターとしての成功を左右する。そのとき、それは私たちが漠然と考える「芸術性」とは重なりつつもはみだす、まさにポスターというメディアの独自の価値を生み出す。つまり柳瀬のポスターは実に見事である、というとき、それは同時代ヨーロッパの前衛美術を咀嚼しての彼のオリジナリティ、独自の表現や造型性を高く評価することを往々にして意味するのだが、それでは柳瀬風表現を真似たいかにも稚拙なポスターの多くは、柳瀬のポスターより「劣っている」のだろうか。

おそらくポスターをアートとしてみる立場からは、答えはyesとなるのかもしれない。だが、「プロパガンダとは、民衆における憎しみの表現でもあった」(27頁)とも記されているような、個人攻撃の言葉が書き連ねられた、そして柳瀬風表現でありながらも佐倉宗吾や歌舞伎役者(田舎芝居というべきか)の「大見得」を切るポーズを連想させるような人物像が描かれた労働争議や小作争議のポスターは、「アートとしてのポスター」などという柔な言葉を吹き飛ばす激しさを今に伝える。そこには多分、民衆の怒りと憎しみ、反権力主義の伝統が、ポスターと言う表現形式のなかに流れ込んでいるのだろう。こうしたポスターがある時代のなかでは、「優れた」メディアとして機能したのだとすれば、つまり当面の目標に向けて多くの人びとを動員する力となり得たのだとすれば、それを位置づけ、分析する新しい視角がやはり求められるだろう。

同様のことは、ポスターとジェンダーという問題についてもいえる。たとえば第2部でも紹介される三越の美人画ポスターは、消費者としての女性像を理想化(美化)して表現することで消費者の欲望をかきたてる広告宣伝の原型の

一つだろう。一方、労働・農民運動のポスターのなかの女性像は、ここで紹介されている限りでは、そこに描かれている女性像もまた非常に一面的なものであること自体大変興味深い。なかでも女性を主体として提示しているのは、消費組合運動と婦選獲得をはじめとする婦人運動だが、前者では何故か大変「怖い」表情の女性像と、母/主婦の陳腐なイメージが目につき、後者では圧倒的に文字ばかりのポスターというのは何を意味するのだろうか。女性/婦人像が描かれないのは、描き手にとって、運動の主体としての女性像がイメージできなかったということなのだろうか。より多くの材料をもとにして、こうした視点からの分析がなされたら面白いことと思う。

*

第2部の梅田論文は、19世紀末の西洋に始まるポスターの歴史と日本へのほぼ同時代的な影響を紹介し、リトグラフの時代から写真やデザインをとりいれたポスターが登場する1930年代までをふり返る。さらに無産政党運動、労働・農民運動など社会運動の歴史とともに、明治末年からの美術運動の歴史が紹介され、両者の合流するところに出現した柳瀬らのプロレタリア美術運動にも頁が割かれている。特に印象深かったのは、都市空間の成立とポスターの広がりについての著者の独自の考察である。メディア空間としての都市空間の成立とは、一言でいえば電柱の増加であるという指摘は、ある意味で当たり前とはいえ、なるほどと納得させられるものだった。私は、かつて、岡鹿之助が帰国直後に描いた異様な(=電柱が乱立する)日本の都会風景の絵を見たときに強い印象を受け、またこうした大正から昭和前期のパリ帰りの洋画家たちを悩ませたであろう電柱が、戦時下の松本竣介の静謐かつ強靱な都会風景の絵のなかでは欠かすことのできない独特のアクセントとな

っていることに感銘を受けた記憶がある。ポスターという視点に立てば、その電柱にはこうした大きな役割があったというのは、私にとっても新しい発見だった。

もう一つ著者が力を入れて叙述しているのは柳瀬と長谷川如是閑の関係、とりわけ如是閑の社会運動への関与についてである。ここで鮮明に浮き彫りにされたプロレタリア美術運動のパトロンとしての如是閑の姿は新鮮ではあるが、ただし「ポスターの社会史」との関係はどこに?という、疑問も残る。

また、選挙運動がポスターを普遍化したという議論にはじまる公権力とポスター、あるいは公共性とポスターをめぐる問題というのは、本来であれば本書(本論考)のもう一つの柱となるべきものだっただろう。法的規制とその網の目をくぐって繰り広げられたポスターの攻防については、いろいろと教えられることが多く、たとえばワーカーズ・レッドなる赤字の多用や黒と赤の鮮烈なコントラストも、当初の印刷技術の制約や前述の電柱をはじめとするポスターの背景の性格によるとともに、選挙ポスターに対する色彩制限とも関わっていたという事実は初めて知った。ただ、産業福利協会のポスターに代表される啓蒙的なポスター、いわば公共ポスターについても紹介されたことで、近年研究が進展しつつある戦時期の広告宣伝への視点も辛うじて導入されているとはいえ、十分に展開されなかったことは残念に思う。特に、ここで紹介されたポスター類が大変興味深い素材であるだけに、公共概念の芽生えと戦時下の「プロパガンダ」への変質、さらに戦後の公共性への回帰とも読みとれる116頁の表現は、やはり、やや言葉が足りないのではないだろうか。

最後にこれは、著者にとってはとりあえず指摘しておいたにすぎない問題かもしれないが、戦後の義務教育の場(小中学校の図工の授業)

でのポスター描きの体験が国民国家形成に一定の役割を果たした、とも読みとれるような議論は、私には実感としてピンとこなかった。個人的な記憶では、スタートダッシュの陸上選手たちの一瞬の姿をモチーフとした、東京オリンピックの亀倉雄策のポスター（それと対になった日の丸の下の金の五輪マーク）が、当時小学生だった私がポスターというものを意識した最初である。この国家的イベントのポスターを見た記憶のほうが、学校で描かされた生活指導的ポスターよりは私の意識のなかでの国民国家形成に果たした役割は大きいようにも思うのだが、いかがなものだろうか。

*

こうした20世紀の文化遺産ともいべきポスターを今見ることの意味をあえて学問領域に求めるならば、それはやはり、本書のタイトルどおり「ポスターの社会史」という新たなメディア論を打ち立てることにあるだろう。そこでは当然、1930年代以降のポスターにおける写真やデザインの導入をどう扱うかという視点も欠かすことはできないし、そのような視点をふまえ

て戦後のポスターの研究もより本格化することがめざされるだろう。ビジュアルなものを言葉で分析することは今までの社会運動研究のなかでも取り残されてきた領域の一つだが、今後はますます、メディアと社会運動、メディアと戦争といった研究が要請されていくことと思われる。そうした学問状況のなかで「ポスターの社会史」的研究の果たすべき役割は大きく、ここで提出された資料や基礎研究をもとにした本格的な「ポスターの社会史」が、新しい研究領域として多くの研究者に開かれ、手がけられていくことを望んでやまない。

最後に、私は本書の書評者としてはふさわしくなかったかもしれないが、私にとっては本書を手にとり、四半世紀ぶりにインターネットのなかで大原社研を訪ねたことは、とても楽しい体験だった。

（法政大学大原社会問題研究所編 / 梅田俊英著『ポスターの社会史 - 大原社研コレクション』ひつじ書房、2001年10月、131頁、CD-ROM付、2400円 + 税）

（こざわ・せつこ 早稲田大学教育学部講師）

I L O の 出 版 物  好 評 発 売 中



Key Indicators of the Labour Market
2001-2002

「主要労働市場指標 2001-2002年」

労働力参加率、雇用／人口比、雇用形態、部門別雇用、パート労働者、労働時間、失業、若年者失業、長期失業、学歴別失業、製造業賃金指数、時給コスト、労働生産性、労働市場の流動性、貧困と所得配分等、労働市場に関する20の指数を国際比較するILOの最新統計。

2001年刊 884pp. 20,000円



Cooperatives in Asia: From Reform to
Reconstruction

「アジアの協同組合：改革から再建へ」

グローバル化やアジア金融危機などの危機的状況に、協同組合はどのように対応するのか。協同組合育成のための公共政策、各協同組合と連合組織の関係、協同組合の支援サービス（能力開発、訓練システム、経営コンサルティング、起業等）、21世紀における協同組合の方向を模索する。

K. Taimni 著 300pp. 2,500円

ご注文は下記へ

ILO 東京支局

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 国際連合大学本部ビル8階
TEL.03-5467-2701 FAX.03-5467-2700
郵便振替 00140-2-19221番/三井住友銀行神宮前支店 普通口座3149206